



日本歳時記卷之六

冬

淨書律唐志云冬終多雨
雜小冬と云々其の○和終冬と云々
此のありひと云々お通す

素問云冬三月これと閉藏といふ水氷を地并に
湯火授け事ありれども砂塵を起さず必日老と
信の志として休すことと匿すことと私を雨れり
あつこ己まゆるるる所はこととあつて免るる事
温につま皮膚と泄す事ぬる氣をうてとて
み登りむらむらふれば冬を手に懸けり
お通すの道ありこれよ通す所を腎と傷ひ衰廢

日本歳時記卷之六

とありなまのりものあり

千金方に曰く冬を天候其氣閉血氣伏死あり人
を又勞心あり汗とわ陽氣を奪ひ死すなりす

月令廣義に曰く冬は万火をく衣服とありあり
事只か暖を所くせしめく大に寒をれらるる
臥疾瘡瘍熱病とらまふ

素問書に曰く冬は火をくあはれ暖あり
履火より久くしてやめられ血を擦す

金匱要略に曰く冬は衣足と伸くゆせらるる
又冬及七載に曰く冬の衣被をく大に

暖なりん睡危なり附目とたり寒く吐くは積毒

とあせえ病あり冷物鉄石を枕とすらるる
人をして眼勝くむ

月令廣義に曰く冬月子を門と出ら付を必盥酒

と飲くを和とあせくへ一或毒置をあらむと又
可なりを腹といむ物也といく冬月の毒毒

多し晨を服してこれと和るがれむ
王肅張衡馬均といふもの三人籍とゆして晨
りもひとり人を病一人を毒一人を毒を
死とゆゆるは死すもの也死後あり病也其

窓下は法編と并く古人と友とひつり人を修め世時
 とひとちつと勵ます一書を志く拙抄に事
 人の精練をあらわすてちつちつちつちつはとま
 かなふは法編に何れい悔意なくく決意遇りこ
 修て用く書法修一といひその年此修と書といひ
 國法よこ時務農而一時講武と有りこれい書を耕一
 松秋の收る旅者人法をたか冬といとぬありゆふ
 一に一を志と志る富せし一はは時といく農人よ
 ち我道と申一と一とるや文選乃修よこ農之波驪威
 中原と修りといふ事ととり

十月

十月 良月 律と修練と云。十月乃和名と律月といふ
 乃らるくの神出を此國はゆはくこと國に修るるゆはく
 一十月といふと略せりや一奥儀秋まきせり詞林要秋まき
 ちくを律月を律月と云又律月といふ律月此律月と
 律月、律月これ又何なりゆあり一とるも今當必
 乃らるるれハハの國とてを律月と修する一といふ
 月天下乃後神出をあらす一修書此中一をたて之我
 修とをいけふその律月をあらす一これ人志といふ
 くるれといふもや又ト此律月此律月乃月なれ
 十月といふ律月といふ律月冊といふありされも
 又人志といふ律月乃月といふとて月此名は月
 月と修書といふ律月乃月といふとて月此名は月
 修する鬼を法に盡あり律月乃月の靈あり鬼を
 こと修に修を春地人修を地といひ鬼を修とせし
 案荒と志おはしと修を修とて湯いかに修あり
 湯とさしてとる修月と湯を修月とるなり
 これと湯月といふ修月一と修法乃月といふ湯
 事と志あきらた修あり一或人代といふ十月の修
 上と云ふ十月と上受月修は修月と修は修は修

朔日 ちりちりして今日煨爐會として民乃可津とて
酒のこぼれと食ひたのむ事ありとや冬に初有る
何れにめき氣と踏をさるとある今を此日初と煨と
記し人可煨爐乃とことこれなりや

皇系明宗時雜記曰京人十月初沃酒乃炙醬肉於
爐中團坐飲喧譁之煨爐又養事錄曰十月初有司
進煨爐炭民間皆置酒作煨爐會

○古訓よきことい今日考妣先祖乃墓而と誦す一凡
父母先祖の墓と誦と誦といふことありと定(た)と
古と山ありありとありとありと地はあり一誦

二洋なり一りりりりの四洋と二相とありなり
合掌々天竺并経ありなりとありなり一乃礼なり
ありむとのありのありむとのありなり伏誦乃事
たせ入合ありなり

經子書曰孫墳幻十月一日拜之感哀也多食則
又泥常神志之飲食則孫志有也張子曰多食与十月

朔日展墓とする也本初生初死家終事也曰韓魏云
十月一日墓を夢事録曰十月朔郡城士庶皆為城
登墳林の中車馬朝凌如多食節○南齊志十月一日
國中風俗皆化橋板或作京師以祀先祖蓋告冬也

初代美日館と書して念事ありおちやけり也上代美
 日肉為寮より此言精とまほあつたれ申して
 ころりいひ言精をさる餅乃名あり あまのつひの多根徳節
 竹花要時なつていなり
 又さる乃恒七種の粉と合く他乃七種其粉と合
 大豆少豆大角豆胡麻粟糠糖ありと堂中層より元
 入りかれ事とりよりけくは日民取よりまて恒と
 書してころりぬい事とりはよりころりもと也乃
 恒在式よのせられ恒をよりありとさるころり取安
 四年汝法ありと大御記取ま師あると助又とま
 けり也も 本朝のめりとりとたけりていひし
 本記とのまよりちのびる新林は手抱後乃い保乃國
 よりけりめくおののらぬとさよりころり國中
 ゆる代并他のすつとさよのぬくおちよりころり二
 とせはは月乃は事なりとさる夜乃とよあつて
 十月のさる月よりしてさる用おちよりまて一年の
 月れ教うとさるすい十三うとてあつてあつた
 ころりころりさ物なれいころりこれ事をこたはる
 ゆるりころりいそをむころりころりころりか
 ころりころりあつれとも并他天皇の沖よりさるはの恒
 ころりころり日本紀あるといふころり又攝略時
 ころり

初代美日館と書して念事ありおちやけり也上代美
 日肉為寮より此言精とまほあつたれ申して
 ころりいひ言精をさる餅乃名あり あまのつひの多根徳節
 竹花要時なつていなり
 又さる乃恒七種の粉と合く他乃七種其粉と合
 大豆少豆大角豆胡麻粟糠糖ありと堂中層より元
 入りかれ事とりよりけくは日民取よりまて恒と
 書してころりぬい事とりはよりころりもと也乃
 恒在式よのせられ恒をよりありとさるころり取安
 四年汝法ありと大御記取ま師あると助又とま
 けり也も 本朝のめりとりとたけりていひし
 本記とのまよりちのびる新林は手抱後乃い保乃國
 よりけりめくおののらぬとさよりころり國中
 ゆる代并他のすつとさよのぬくおちよりころり二
 とせはは月乃は事なりとさる夜乃とよあつて
 十月のさる月よりしてさる用おちよりまて一年の
 月れ教うとさるすい十三うとてあつてあつた
 ころりころりさ物なれいころりこれ事をこたはる
 ゆるりころりいそをむころりころりころりか
 ころりころりあつれとも并他天皇の沖よりさるはの恒
 ころりころり日本紀あるといふころり又攝略時
 ころり

書と刀の作一又第の天皇二十二年十月亥日辰と書
り一と一と一ぬきと一これ又ありたふと一又
ましく國史ある事も志りされハりまてあれと一
然乃言たり人一源氏物語よ子れハりつりま
と阿比の妻の日月館の孫とむむりもく
撰する二月令度義一五の書と引くもく十月亥
日解とく一八人一病なり一ひ又新編系
花音ふもかくと一女子のたりれ一
くたよと一多く一むむりま
かれと一と一婦人女子のたりれ一

事なり一と一れと一り
十五日ト元ノ節と号次四月十五日と元一七月
と元日と中元一十月十五日と元一
と号に及家乃夜あり

晦日沐浴

は月暮ありこれと液雨と云和信と河内と稱す月
令度義一と一國信立冬と一
吾人等と出候と一
号信曰これ又朔日と云く元一
あるにあり一

八月廿日取て皮と削成串につくぬこつ入替り
 此を以て日と晒し皮とくつはそくす
 梨子と又梨子と收ま一梨子と收は梨子と
 数顆茶と心く梨子一顆入さへん
 酒家なるさふ入まひ久よ塩の風をよあか
 月今度秋よ入えり又塩をさう大柴とあひ
 薑と元ふり薑に挿し紙よ包て暖あつあよ
 入ま深く入まゆくと換は換と替り
 又ひくす一と居る必用よ入えり又梨子
 と漆とてぬれハス一と換は換又拍部お成志は

梨子と收ま一薑と心く梨子と收は梨子と
 数顆茶と心く梨子一顆入さへん

八月乃末蘿蔔の中実一たつと蒸す一十一月
 よいれハ中虚して何

○蘿蔔醃の法 蘿蔔 千中 細糖 一石 麴 三斗 塩 二斗

先方根と切日日入りと後細糖と塩麴と所
 合を挿し乃入るまろ蘿蔔とあぶるよ又糖塩麴
 とろの何つんよもめひま一はは久一塩
 ○又法 大方の蘿蔔千中よ塩を半入せとけきて
 たり方時用の気より塩多まれハ一又ぬかり

なとをへへる

○又法 青蒿とくはひつらちをち 每粒席とせみ
葉少あつとち後まつとあつひ水守をた何き法
青蒿一つんかへ塩と青蒿かてゆかやくより
麴とつらあひほくは漬やとりけまへー又たほく
ほまへ後ハ酒乃糖と米粒垢とつらまセたの大根と
あひくはひ焼方何法をたし

八月又竈を修繕す

八月梅子の秋熟せりと取りし賜一草とー又あ
法とす但葉ふらひのつと用ゆあるは梅子と云

又月金廣義よとく十月は梅子の熟すとあつひ
能く身ま三月は熟くうぬ多のつて灰土とく
ひいあとうゆとくー次代年梅一裁ま定
つてとちと結とつら又月よさ一本にて

名約畫後よとく十月葉葉のよりた枝を一尺たり
又きり日あそよた地とあつてつ水よ多くうつ
五月月よつらて根ますつと水邊林下つきの地
はてもつらちうゆまの活せとらうな 南平部
花とつらうてよ後とつらよひ月あてと
あにらつたあちう元本葉葉を紅にてあま

十月申の概概と紅葉多しと此處の紅葉
 年のより事よりて運送の氣候と云ふは
 十一月上旬より雪ありて凡紅葉の事
 花子をすくはるるなり。因何の紅葉は
 一、藤田の紅葉の多し。一、雪ありて今冬
 有し初秋の尾の紅葉は若雪の多し。又
 運送の事と云ふは、是月暖帽と裁く事ありて
 和やせの暖帽乃疾なり。

十月申とくくハ大に雪あり、猪肉と食ふかられ椒と
 くくハ血脈とやゆり進とくくハ凍凍多し。霜あり
 うくれら熱葉とくくハ雨れ多しと先くくハ猪肉と
 くくハ雪とくくハ月令度義より云ふなり。又
 種と食ふかられ猪肉と食ふハ病疾とあり。中
 来其の事書より云ふなり。

十月ハ去候中一水如氷牙二地始凍中三雜入大水
 為屋太と云ふハ三候なり。中四虹飛不見中五天
 氣上勝才去地中六海閉塞中七大雪六三候之
 立冬五箇中六割中十分中十分中十分中十分中十分
 海反射 月令度義



梅桑嵐非言卷六

六

十一月

首と去雷と云中と冬と云○十一月此天名仲冬也
後胎律と對漸と云○十一月の和名と去月と云
事多かりにうと史實海月
と事と異せり云

朔日周乃代天子の月を以て衆者として侍れん今日
かつら周代時の西月元日なり天を以て并つる義
とぞわると云

冬を以十一月乃中なり云とて一法法極の至二
陽氣始く起るとは冬日乃中なり云とて一法
冬を以て一日は卯にて陰氣始く起ると云とて一法
冬を以て一日は卯にて陰氣始く起ると云とて一法
冬を以て一日は卯にて陰氣始く起ると云とて一法

以て一日は卯にて陰氣始く起ると云とて一法
冬を以て一日は卯にて陰氣始く起ると云とて一法
冬を以て一日は卯にて陰氣始く起ると云とて一法
冬を以て一日は卯にて陰氣始く起ると云とて一法
冬を以て一日は卯にて陰氣始く起ると云とて一法

易曰雷在地中復先王以是日閉關商旅不行后不省
言也虎通曰此日陽氣微弱王君亦天理也
後不復行役扶助微氣來業也伊川易傳曰陽始
生甚微安務而後長有復之象曰先王以至日閉關未
曰一陽初復陽氣始微不可勞動
○今日復と云一也人奴僕も少もは之陽復と云

一又先祖考妣乃孟采少を献し奉酒とるふ新
果とまじへ

○冬廿乃日積通改火ハ瘟疫とあく徳源書行依
右ノ尺えり福と積ニハ本とりて火ととるま
松子実り冬廿乃日

天時人事日お依冬廿湯生喜又東刺綉五級潘弱
維吹葭六策勅飛原岸君依臘將針柳天宮御文
秋致梅雪お不殊郷國吳教也止霞堂中杯

○冬廿の法十日房事と忌くしと道と海よりんえり
は比ハ人カハ氣と燭くひろ免かてくくちて池とく

ひく才事喜お生代根幸とすへ素阿の云冬不
喜心癘疫す又冬廿乃お後各十日燭氣すへ

十日 孟子の卒せり日あり
崖肆考云孟予周報王二十六
月十五日卒即今十月十五日

晦日 沐浴

予の國乃農民は月乃初代丑の日四社とあつては合
とろ又その服とまらちく男女何すりて炊宴一人
とる事あり乞の比よりまらちく人々
賤乃男儀の如きた四社社とのひく何れ社
とあつての事とまらちく未擲とつて
如く耕代とあつての社農氏を世ハ合

西此回神を神農氏とつゝあるべし。されハ神農ハ人牛
 前シハ五日日あるまや五と半とお返志とく用りな
 ちりい月よばあるととるまの農事終る内をいハ
 賦シ法と法と記をなすべし。 杜氏西典より伊耆の代始有曆
 及神使之記也 及神使之記也。神農之記也。其記曰
 乃シあるたむとくあるはつとちりハ地を記事あると
 事と進シるるハ始と忘れらるる民の徳あつたは
 事ハ天子乃礼を備へて日月の系とあり。巫聖の
 乃言シまよのひて此礼乃事とと成又はすまハるは
 こと天シ地と満をくく。い事するハ國のまあるは後

ありまのりなはつとくハ但國よりくあるまやも
 らんもろく。まも十月ハ田神とある事ありや
 されハ事始シ記あるまも十月農功畢。里社皆五
 食シハ神回神因ハ飲食世終は地始ハ月人ハ情
 これととく見れハハ國乃風俗ハおのり事なり
 月シ月シ橋シ金橋シ柑柚シと冥シ神シ。一ハ橋影乃收す。十
 月来りい月初よ少くまもと事く。まも食く。醫世
 時先ハ力ととく。橋の影と云ハ食つる移く切地
 かけす。愚又志シグシなハ。いハ。むシる。渡シハ地と
 あり竹シやシくシ棚シとシ他シハ。おシまシる。まも。下シあシす。とシる。棚シの

上は能く松葉とまきしてその上は楢を合さるや此處
 照くは楢と切りて右にまきして上は風をれが
 ひをりて二番の附をあらと能く切りて一はまき
 縮まりとす一はめはまき六月の比まで持す楢
 よく熟し一は附をれい久しくおせひまきれあのも
 ころ附更し一は二月までいれの酸味おれと六月
 せりく味り一は楢の上下乃万をれい上は楢下
 一は附の合をくまきわき一は生葉とまけは遠
 とまきしてつめくやめり楢抽合楢と切りて地附一楢を
 寄楢よりおえ一は楢の元楢を切りておはる

よおし一は米よまきつくり又お聚お慮志うの全
 楢を切りて葉を楢の中よ入る久しして楢の柑を
 切りいやま物よ入れまきつくり油油をいれおひてよ
 又抽餅子合楢一は葉をまき一は切一

○抽餅子代物法 楢のちをれ方とわきくつりぬまき
 こと去 いれ口とあられあ一はの いれや一はの附まきつくり いれを楢のちとけいして
 好まきと能くつりて油糖とつらむとり合世胡椒胡椒
 櫃買ちと入るまきまき合世おしら米乃平楢の楢
 ましてまきいれつくりいれまき三分一切りいれす合
 てたより 或事まきとのみまは楢糖と まき胡椒生薑等と加一 ちれまきと楢代肉八分糖

入蓋籠子こむむ一能熱一なる付取が一日より控え
 かあれば入り方附よく置るとうけりて油の日少く置る
 能く日より控えて置くかうすうすも入信風吹雨よ
 ぼりて美一凡抽一なる抽此酒と飲よへり味又こ
 るく好んぢもたれとく置くよう

○金橘（一）の法 金橘の大なるを取油よくしり外
 ていろこよあけて白やう日よあけて煮よ入口よく
 好一風ひりきりやうふぬ煮よ一

○大柑（一）の法 大柑分とく油油あくしり味と
 ざり油をこも一油うまたく置る入をきりた封して

○控（一）の法 控よ取く元とあけて置る油よく煮
 一めりより一て貯美一

ば月（一）煮るを多くたくて冬よ用よ備之一茶と
 一二寸のう一とあれ方と切ると 苞よ入屋巾に紙垂
 去苞よ不入ちあきうゆさけうつる角落たかからぬやう
 上とこを煮も切ら少一と煮と去うの茶とこそうて煮取
 と切へり飲煮取とされん氣ぬけくよく飲虛を煮
 又ば月（一）乾（一）葉の根と多く削りて貯一ちうしつ
 ぬきこちゆ一と煮るがかりしるの葉と煮る初ん
 のをまいつつまげ正月の比りよ削りて煮よ取めると

あま〜〜久〜場〜又〜月〜
あま〜〜久〜場〜又〜月〜
あま〜〜久〜場〜又〜月〜
あま〜〜久〜場〜又〜月〜
あま〜〜久〜場〜又〜月〜
あま〜〜久〜場〜又〜月〜
あま〜〜久〜場〜又〜月〜
あま〜〜久〜場〜又〜月〜
あま〜〜久〜場〜又〜月〜
あま〜〜久〜場〜又〜月〜

仲冬之月采榲婁菁
葵等乾之為鹹菹也

月令曰〜〜是月也〜〜
月令曰〜〜是月也〜〜
月令曰〜〜是月也〜〜
月令曰〜〜是月也〜〜
月令曰〜〜是月也〜〜
月令曰〜〜是月也〜〜
月令曰〜〜是月也〜〜
月令曰〜〜是月也〜〜
月令曰〜〜是月也〜〜
月令曰〜〜是月也〜〜

竹〜〜ゆ〜〜事〜〜
竹〜〜ゆ〜〜事〜〜
竹〜〜ゆ〜〜事〜〜
竹〜〜ゆ〜〜事〜〜
竹〜〜ゆ〜〜事〜〜
竹〜〜ゆ〜〜事〜〜
竹〜〜ゆ〜〜事〜〜
竹〜〜ゆ〜〜事〜〜
竹〜〜ゆ〜〜事〜〜
竹〜〜ゆ〜〜事〜〜

は月〜〜龍〜〜食〜〜
は月〜〜龍〜〜食〜〜
は月〜〜龍〜〜食〜〜
は月〜〜龍〜〜食〜〜
は月〜〜龍〜〜食〜〜
は月〜〜龍〜〜食〜〜
は月〜〜龍〜〜食〜〜
は月〜〜龍〜〜食〜〜
は月〜〜龍〜〜食〜〜
は月〜〜龍〜〜食〜〜

はあまの葉の書
等〜〜あ〜〜

十一月の六候才一踏旦不鳴才二郎始交才三嘉
挺出右大智六三候才一才四地引結才五麿
角解才六水泉勃才七冬玉の三候なり

冬玉登二十七刻二千分夜中二千二刻二千分大智五
芒種互射 月令度最

日本書紀卷之七

日事業時紀卷之七

十二月 節と小をく云中と大を云云の十二月の吳名孝老 漢名
歳月 徳と大智云云の十二月乃知名と志大比くつ候と

びく佛名と相する人あり候とよまむ事ありしり内あり候と
いふと候と云々一 舞伎抄云々あり候と云々候と云々候と云々候と
月乃れい志のつと云々あり候と云々候と云々候と云々候と云々候と
其後乃國々は極方あり候と云々候と云々候と云々候と云々候と
いふと云々の所置と候と云々候と云々候と云々候と云々候と
附考れ候と云々候と云々候と云々候と云々候と云々候と

朝日殿乃代才建丑九月と歳時とせしり今日日事業
殿の正月元日あり四候これ日と云子朝日と云又云子
乃ららと候と候と候と候と候と候と候と候と候と候と候と
すりし事と云云二年乃乃事と云候と云候と云候と云候と
かき事と云と云と候と云と云と候と云と云と候と云と云と

八日ありしは臘八と云今日靈と云く月経と云
一 案時記十二月八日経脈通熱電神と云の案
考又電と云つるを云ふは乃風俗なり

按之乃風俗也一類項氏子乃黎と云ふ家から
祝歌なるに記しては電神と云ふなり云れは
一 案時記と電神と云ふあり又案時記に
身は彦神無津姫神は二神と云ふ人れは電
神なりとありてこれより我國の電神之

○今日水と云ふ壺を以て入野重一救方乃
臘中時水来辛治一切疾病製飲含臘八日水
丸神たりとあり

十五日釈迦佛涅槃日あり破邪論に周穆王五十二
年二月十五日佛涅槃すとあり周代は六十月と云
十五日と云ふ佛滅日と云ふあり

○上有春中旬乃中臘月乃帝より多く春
際にては正月乃用と云ふは乃は冬春本
と云ふ臘日に宋と春と時並重なりと云ふ

范玉能回案府序曰余居石湖後來四忠の得案
十変探其法者賦一詩以識其一二春分臘日

春米为一袋計多發抄曰偏中畢事抄曰先之土

瓦倉中經年不壞抄曰名多春米抄曰出子車抄曰文刻聚

○十五日此後屋中乃煤塵と掃く一煤塵と掃く
世人多く約白と乞て恒例抄曰之手施せとて或風名此後何
多六約日に物抄曰す十五日乃屋風多抄曰乃後日と用

國書抄曰ノ澤志抄曰を引て臘月廿四日毎忠掃塵也

わさハ中毎抄曰のたまる抄曰や乞又約白抄曰と物抄曰と云

二十日 抄曰此日後乃予と云抄曰カ子けりと掃物

困俗は月中向より後乞人抄曰在緯物

みく西とちひ又緯物抄曰を膝抄曰と敷抄曰ひ鳥帽抄曰子と忌

たまらふといひてさるくの程詞をう抄曰といひ舞たり

くまありと云はるるといひあまきといひさきま抄曰く
却都抄曰たよと云事あり

○下旬此内親戚抄曰の送物抄曰一て菓書抄曰と契抄曰す又志抄曰わ

下此親實抄曰乃孤獨抄曰を名宿困若抄曰代者抄曰も親力抄曰に送て妹

とと贈抄曰之抄曰一或親抄曰又常抄曰く思抄曰酒抄曰あり人師傳抄曰と云抄曰方

人親身抄曰及友人抄曰乃病と瘡抄曰せし醫師抄曰を抄曰も抄曰分抄曰り

送抄曰くあつと物抄曰と云一疎抄曰房抄曰なり抄曰く抄曰は抄曰く抄曰も抄曰此抄曰子

を給抄曰くせん抄曰う抄曰給抄曰くせん抄曰う抄曰給抄曰ひて決抄曰一か抄曰く抄曰ハ抄曰給

はく一抄曰都抄曰者抄曰なり抄曰く抄曰ハ抄曰元抄曰都抄曰各抄曰かれ抄曰ハ抄曰仲抄曰義抄曰行抄曰かれ

す人備抄曰とあり抄曰く一困窮抄曰とめく抄曰ハ抄曰事抄曰を抄曰す財抄曰と

とてそりたたくて久りてあれ口さひなる
そのありきあはれ程とくくはなとある

風土記曰吳蜀風俗歲晚相與健健之健案又獲

假拍不漁貨山川流石產其為稱小大宮聖巨御權

假拍不漁貨山川流石產其為稱小大宮聖巨御權

假拍不漁貨山川流石產其為稱小大宮聖巨御權

假拍不漁貨山川流石產其為稱小大宮聖巨御權

假拍不漁貨山川流石產其為稱小大宮聖巨御權

假拍不漁貨山川流石產其為稱小大宮聖巨御權

○又下旬内年三三之父母兄弟親戚と感ずる事

ありこれ一とせ乃乃事なくる事と後さるる

種子暇別案待曰友人適中皇懷雅尚遲人外於

可復案行那可追向案安所之志在天一雁已逐

東海水赴海降冬時東鄰酒初製酒舍瓶七肥其為

一日款慰此意年悲勿嗟案案別行与彩案辭公

古勿回返還云老与衰

又柳柳代醉柳又とく誰人案書古

同漁者い等代後と考思れハ

一とさる

乃海あり



博多歳時記卷七

四

○は月下の午乃日ぬく〜と〜と臍をぬけ〜
髮と一毛をち〜きは一年乃百薬〜
勢に和〜と焼その灰と薬〜
二十七日は比鱈と製す〜
よつた大薬乃昂の肉より別に鱈を他り今日午出
に用ひの〜と製す〜
美に〜て久〜
用ひのり救多く歴〜
漢他大薬代肉よ製〜
ハ毒にやり〜あり元鱈と製す〜

わりの薬よ末と〜
阿波ハ心〜
解れり〜
中薬と用れ〜
にたす〜
鱈肉の〜
まよ〜
ひき〜

二十日 屠種と合ひ〜

○醫林集要屠種方 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風

各五々 川烏頭 白朮 菝葜 各二々 右八味對之 絳囊以
 之 除白に井中ニ掛座に沈め元且又取布
 囊尤又湯又浸一カ敷一カ取又向之これを取後
 に囊を井中ニ置之川氣と服す其六尚年瘧疾と

石菝葜 菝葜之少取本乃車多有り日中取之

○又方 赤朮 桂心 各七々
本草綱目云 赤朮 赤朮之小赤方云 赤朮 赤朮也

防風 一兩 菝葜 五々 蜀椒 桔枝 大黃 各五々 烏頭 二々五々

赤小豆 十四枚 三角乃絳囊よこれと乃之取布

招所 赤朮ハ菝葜水より根心ハ肉桂の皮はつく
 ちくちくこを肉外の皮とさうんを用ひん

○又方 大黃 桔枝 川椒 白朮

獨心 炮去皮膚 吳茱萸 二分 防風 一兩

○本朝居後方 白朮 桔枝 山椒 防風 各一兩 肉桂 五々

大黃 二分半

○白散方 白朮 桔枝 細辛 各一々

○渡嶂散方 麻芩 山椒 細辛 防風 桔梗 乾薑

白朮 肉桂 各五々 已上三方典藥頭並安信濃方也

○此方志方繩と依り治日代用之

晦日 沐浴 晝食倍多有り 晝際と用也

晝食此後上より下よりそく兼善と繋一團老交
 長親戚乃此より後そく兼善と繋一團老交

洗て乾す一

○屋巾一及宅巾と共く掃漆一門松とたて戸より

引運種とせし一

此等御祭の御用此等御祭の御用此等御祭の御用此等御祭の御用

所心云は此等御祭の御用

○今夜と除夜とより又除夜とより二年の初日の夜か

まのほしと心と志つらに徳服と志酒合と志祀

乃盡最よそありたりしを酒合と食しや少く奴奴も

ありつとせと事なりし一ぬらりと事よ歌集一

甲しと心と事と事なりし一ぬらりと事よ歌集一

圓更に風生記よりと除夜を甚志祀也幼歌飲祀

願可敷得之分業けり一年の終るおるれいかく

みくし事なり又佛あり今夜方人のふあし

ありまするよと事なり一都野経より言え侍れ

と乞浮屠の法もまた佛生れ作用とては所可

○今夜の床臥几上及夜下竈より香と焼く辟邪祛

淫直節氣助湯法又外より焼と焼一且よと法

所より焼と焼一燈より廣新多く焼く中中光願

以し湯湯動と焼一又と夕々昔人氣と和唯よ

去く下人との思ふるやれ怒と静して氣と傷

事なりと事なり一と祀と掃すり事なりと淫慾

元徳一一人一月令度義乃及之

○今年中一歳は月何事と西代事と今夕中夜は
焚い疫氣と毎と四時暴風江入るなり又今夕茶
本と多く焚い疫氣と毎と直生痴ふとえあり

○信又治之今宵倭豆とらつて倭豆とらつての事
乃信の人の信

庚申乃追儼を十月晦日の一もあつたにえたり
金吾宗徳進備前と何れも今宵そは事とせしむ

とね豆とらして悪鬼とあせざる事後同答なり
あつひは悪鬼乃ね約さるる故に禁中をむじり
陰陽寮とてとらつてとらつてとらつてとらつて
ありとせらるる事ありとせらるる事ありとせらるる事あり

かことゆつて肉素れはつとまゝなるなり又

上人とて神殿のこゝまゝとせらるる事あり

とらつてとらつてとらつてとらつてとらつてとらつて

らあつてとらつてとらつてとらつてとらつてとらつて

建永三年三月天下は因疫疫死多死
始他土事大備すもゆりこれそのんりつる事又

國信の舌津事其池の多し方丈れたなり

聖徳の事とて二匹乃鬼おと都よりとらつて

汝乃はまじりなりととらつてとらつてとらつて

事は奏しとれはあはれきととらつてとらつて

乃捕とらつて事ありとらつてとらつてとらつて

うらゝ鬼共目とうらゝしす一埃囊物よ志れ
 俗も石經の影候まのりか影を影に候と云
 るれ毛地と何そらん色口打一これかぬされハ
 儼々瘦とおいさふてさる九敷乃やうかなさ
 用終礼記備後あもの世よりそれより後世ハ
 強候志よ志るさびしきめ 跡又又選乃強
 衛り東家賦よ伴なり又は本赤丸ぬ敷とす
 うらゝさすくさる後漢書乃ほい力えさりぬ敷乃
 中の互のまハ今 四倍の量うらゝのさ風
 や おんやうひと鬼と云いさるるは氏物終よあやかと佛も
儼とやらぬしうらゝるらよと追と云さるる初と云

ありてあぬ人いさかこたは角ありて佛書より宿願のくくお
 そろり一さ形を物ありしきありさあまの夜ゆれハ陰れ字
 と御り御神の靈氣とさしてより陰邪乃氣を感候人
 をうらゝの物やとされとおいさるるさるるさるるさるる
 りとさ物多れり善惡のりうらゝと云ん湯をゆく法を邪乃陽を
 善なる法を悪なりいある湯と云ん法と云んさるるさるる
 又 困候まとうらゝ鬼をくく縁をうらゝと云ん
 たり 披とゆふ古人乃ゆふ陰をれまと縁ま
 勝中作に終抛擲打悪法方鬼眼精と云んこれ
 大皇と投く鬼れ眼とうらゝつと云んさるるさるる
 志まよ志りまのつと云んさるるさるる
 鬼とくもさるるさるるさるるさるるさるる
 ○今おらゝのから大戦と新よさびる同鼻と云

鬼乃人とする人とと居とあせく御をうと一族
囊抄に記えわれこれ又嘉徳の夜る是ハ作風
とりにてすくすくはた自記よあしりか
ゆれハ上の法をうと一ふあしりか
くしの書は枕笥畫箱畫牒帳戸をくゆり
の鬼とあせく志まのゆりまゆれその勢あり
○屠猪と今日より井の中に浮く一垂り一垂り
傳芳齋の漢教のゆり

一杯菜酒を留み坐看新年上盤詰只也梅
明日を花餅お刺し知を

又冬通のゆり

旅飯を飛鶴の眼をん何事持渡れ左郷今言
思千里秋葉明報又一年

又方秋雁の

更与梅乾把一杯醉飽帳字等春來須臾便
の年事留のを各一併圖

又王狸の

今家に記を明年四月休息一松去春五
更亦氣色穴中穴宿就睡忘備風光人不定已
是後園梅

古今集の喜返列樹

こゝろをいひてきりておのほ海をへんちまのり
後集をよみふりあふる集後

とよまをわたりぬかへりてふりてふりてふり
玉をよみてふりあふる集後

色ぬきあふるをさしたるおのほ海をへんちまのり
堀川百景の因作

何事とせむをなへりてふりてふりてふり
又歌集

つねとふりてふりてふりてふりてふり

○は萩獺の形と圖をく枕に堀えはれぬ色とぬき
て今の世傳よとあるやあし信はる獺をよと今も
ぬきをりあこれと用りてふり

梅とぬき獺を爾雅よとあり洪洞及竹とく
新代色居かり獺屏の替代序よとく家鼻
犀目の半尾虎足は皮をぬき海圖其形ぬき今
後集の白澤又漬ぬきとく皮为生摺即禪列
勝外之氣これり乃後とぬき又色居の形と
ぬき物をりあこれと用りてふり
今よとふりてふりてふりてふり

改嫁の婦人多し一部をとり承多し

これより婦人女子のたがひ多し一て夫の事
一に事よりあつて凡世俗に危き男とあく年
数より一に凶災ありしにせむは一む
年ありは年あり方人ありは年ありは
一むては災とまぬき人事としむ俗巫乃
ともぐりこれと幸とて民乃城をつむるを
事と一ゆりされといふ事一か書り忍び
日幸の四祀子をみるにむしむるは海法
ア一とや世間経よ大正九年母なる事と

大正九年と六七歳より九歳と加え
まくとより七歳十歳二十歳二十歳四十
三歳五十二歳六十歳七十九歳と加え九
老湯代敷なり湯桶れいありは事と
治より入るより去るれをいふ年事と
事と一むの年の事とせむとらよ
教と一むとらよ危年の事とせむとらよ
俗といはれは祥より一と一むの事と
教と一むとらよ一むの事とせむとらよ
一むの事とせむとらよ一むの事とせむとらよ

或笑人ひとり物ゆきせを〜と〜と〜と
 乃青山秘術を〜天命を〜何〜の〜
 とまぬ〜や〜危年と〜
 乃後身之の成代日と臘日と号〜
 又古此聖賢民之功の人とす〜
 又玉船を興〜臘の生
 祖とす〜百非とす〜
 乃今世信又室の中とす〜
 乃食物基物とす〜

た〜て換世の此時物守り物り又記す

○乾薑と製する法 母薑と室代中のあ〜七日
 亦曰又日浸〜取わけ皮と去日〜干貯〜
 ○山菜と〜之貯〜法 此山菜〜りたり
 辛久〜薯蕷と〜い〜皮と去切〜
 て米粉とあり〜粉〜
 ○糯米と糯米と凍米と〜法 一日又漬〜
 一日の乾すぬ〜七次許〜く浸せハ米氣
 ぬき〜糯米〜
 粥〜て病人は用れハ泄痢と〜

てん腹みぢづまひ

○救米と乾飯（ひひ）とまじりて 救米と多く臘水（ろうすい）と毎日
 後（のち）に蒸籠（むかし）にこめて曝（ひ）乾（か）と瓶（びん）に入貯（いれたくわ）垂（た）一用
 り時熱湯（ねつとう）と漬（ひ）也（なり）の速（すみ）く飲（の）む（べ）粘（ね）る（り）や一（つ）て胸膈（きょうかく）よ
 不塞（ふさい）苦（く）可（か）あり餘（あま）り乃（すなは）時布（ときふ）を包（つつ）てこれと沸湯（わいとう）に
 投（な）ず（ま）ハ勿（な）く飲（の）む（べ）たり氣剛剛（きこうこう）送布（たうふ）一法（は）平（へい）石（せき）可（か）飲（の）む
 ○糶（せう）糸（いと）粉（こな）と炙（い）り（ま）す（し）法（は） 上（かみ）白（しろ）糶（せう）糸（いと）と煮（に）り
 一（つ）臘（ろう）月（げつ）の水（みづ）を後（のち）に毎日飲（の）むと少（すく）二三（さん）日（にち）色（いろ）と石
 臼（うす）とよく洗（せん）ひて右（みぎ）糶（せう）糸（いと）と磨（こ）ぐ（ら）みとらえてまめ
 いとよく一（つ）瀝（れき）と（お）白（しろ）の石（いし）を磨（こ）ぐ（ら）みとらえてまめ

あふに桶（か）入（い）れと加（か）へ（い）一（つ）粒（つぶ）豆（まめ）と漬（ひ）めと去（い）り（ま）す
 毎日水（みづ）と搗（う）ぐ（ら）水（みづ）花（はな）とら（い）り三日（さん）くらり（ま）後（のち）棉布（めんぷ）
 の紗（さ）袋（ふくろ）よ右（みぎ）糶（せう）糸（いと）と入（い）れ（て）あ（ま）と去（い）り（ま）す
 水（みづ）とよく洗（せん）ひて後（のち）に小（ち）入（い）れ（て）あ（ま）と去（い）り（ま）す
 あま（ま）と一（つ）又（また）袋（ふくろ）を（い）り（ま）す（し）つとく去（い）り（ま）す
 去（い）り（ま）す（し）て袋（ふくろ）を（い）り（ま）す（し）て日（ひ）の布（ぬ）を（い）り（ま）す（し）
 時（とき）又（また）こ（ま）ら（い）り（ま）す（し）て陰（かげ）干（ひ）す（し）とら（い）り（ま）す（し）て乾（か）す（し）
 小（ち）入（い）れ（て）あ（ま）と去（い）り（ま）す（し）て氣（き）の油（あぶら）を（い）り（ま）す（し）
 一（つ）用（もち）の時（とき）中（なか）
 くとこぬと解（と）け（し）て一（つ）熱湯（ねつとう）を投（な）ず（ま）後（のち）水（みづ）を後（のち）
 食（た）べ（し）て事（こと）留（とど）け（し）て再（また）煮（に）て食（た）べ（し）て又（また）赤（あか）豆（まめ）の煮（に）

くたにふるとけいへ食の甚多あり性熱泄痢を
その脾胃と福ふ事おけしと再煮て用へし但宿
食氣滞ありふ月更しと云

○赤小豆と多死よとるは 赤小豆と守中よ煮と
きんくたに袋よ入しとて煮るに法平のし收ま
年と行久しとて中用てを換せし是月一應解の
はよ用てしと煮るに即時よ用やすにと云
○臘水とく糖と製し大に切て二三日おきて後水
よつれ又二三日おきて二煎しよよ付し米粉と削
きと又臘ありん八五と煮る所は丸の製湯よ入

製中此肉やとく通るかと湯の中は煮くは丸
煮と次煮久しと煮て煎し一製湯に漬しと米
豆粉と衣しと用の粉をくしと煮く性熱と氣
と石塞恙久しととるに正月申ハ二三万の一度水
を擽へし二月より毎日あると切るしよよつとる
米粉と去されぬ換し奥のし

○臘ありしと事製と製するし久しとて換せし丸
事製大豆と煮るしと大豆と石よ水と石粉入
物食のた後よりは老ありとすくはしとて後ハ火
のこえ次第よまたとて製せしと能たあり氣

乃淺きるわんに中一乃とおぢひ夕合るまてとけい
 能に急熱してあつても耐又ゆ火とたきあてめて
 糸公一白あくよくけくたれ法あくと飲より明朝
 まてけして毛用一筋のかのうらるをまてはえけ
 如此まれの筋と功とと多く不費一と結熱一
 豆け不濃一して性合く味美なりうろ火と冬
 くだらみく熱せしめんともれい大豆けぬを
 てうすに作る糸末粉の味前
 二三一粒かき
 煮れい味持せす

○白米粉乃製法 大豆を石皮と去水し後一

蒸一熱して上白乃米麴（麹）五斗或六斗入塩三斗
 合くよくくうとつと桶よはめ量三斗日とくせて
 用の味極く甘く色白一

○五斗末粉と製する法 大豆一斗麴一斗酒糟一斗
 米糠一斗塩一斗右一のよつと合するなりぬらひつりて
 けい未粉性極く腹中につく是次病人は用てけ
 魚肉をまると煮くぬふより

○ぬらそえと製する法 米のぬらとあててぬらこぬ
 瓶にて熱けして熱一たる時火とたきまてをま
 玉製日久しむる何取かぬら一石よ塩一斗末

并湯油のこごと入白く終つてさそせぬ上げ温氣
乃強りたるをさす一桶少くも瓶くてもはせぬと
そく至来年正月よりあつて又白く入つては
器に入る一

○又法ぬくと多くとかこQたのあれ帯の向
に海をゆふぬくあ桶くても瓶にこ入陸十
又日行してかこくあつて白く入る一
とさると塩とさく白くはる合せぬは桶よ
て毛瓶にこも器に入ると付るあつて塩のあつて
とさると白くはる一とさるとはるあつて塩のあつて

臭かた臭はあり胸中に氣滞り合滞り一とさ
病人に用へ一

○厚皂と塩淹する法 厚皂を丸毛とぬきまて
腸と去洗つて毛を絞せぬとぬき腸と塩と入
又厚入り毛を絞つて多く入又外も塩と
よく付足とつとさるとはる合せさうさるははつて
一板とけの塩ゆきとさるありそ厚紙よつとさると
苞よつとさるはるさけまへ一法を丸毛塩淹れは丸毛
○塩淹錆の法 海綿と紙はよさう塩と多く付き
桶に入るとあつてはる一とさるとはるあつて

合せ一俵くふりくして終や〜とつぎまで
又鷹こぶの包てき〜りま〜けけと古ね〜く〜て
こもに包あひ〜く〜く〜か〜けて一日も〜
よちよち打〜して塩た結約まる時つりさけ至
〜一或赤土よ塩て〜

○魚な多た携た漬漬乃乃法 魚な多た塩と付く中中日日と
一日一取至 類は漬つゝ三枚を塩と漬す
下は〜く〜深〜れ〜け〜 其後取出〜

〜く塩と法法去去紙紙と〜く〜氣とぬ〜く糖糖〜塩
か入入〜く〜い〜ま〜ん〜塩と用用ゆゆ魚魚多多乃乃塩塩かか〜
ぬ〜後〜して塩と寄寄〜さ〜魚魚多多と携携に漬漬〜の〜

〜と〜
男男ああ〜の繩繩或或寄寄〜さ〜あ〜の〜く〜ま〜り〜で〜す〜
其〜風風引引〜さ〜く換換以以換換せせされい魚魚多多も換換せす
其物物と二二發發用用て〜さ〜〜を耐耐〜〜粉粉〜〜い酒酒或
塩塩多多と加加〜や〜け〜〜

○紐紐締締〜た塩塩引引〜さ〜乃乃法法大大切切〜り骨骨と云酒酒よ
浸浸さ〜り〜あ〜く〜つ〜ら〜な〜た〜は〜ぬ〜さ〜平平〜
水水じじ〜た屋屋下下よつ〜つ〜け〜ま〜て〜
〜と〜あ〜つ〜い〜ま〜さ〜い〜酒酒よ浸浸せ〜た梅梅〜た〜何何〜び〜
○純純大大根根と〜乃乃法法 中中〜れ初初日日菘菘のの扱扱と都都〜り

能一切の瘰癧疾及瘰癧癰癩等れ瘰癧毒研酒時疫と
 治し目疾といやこれといふゆと他り瘰癧と他れん時
 取美いして久々瘰癧を治して瘰癧肉と浸せらるる月を扱
 せ候又又敷百果乾蔬乃種子と浸せらるる多くと
 治し生きたる鳥の肉といふも瘰癧を治す
 と治むと月令廣義より云へり又いふ瘰癧瘰癧中
 食麩とのりは瘰癧を治す物瘰癧を治すといふは不
 臘月よ志めぬる香油と煙と蒸すまは瘰癧不入膏
 薬に用て邪効有り婦人の瘰癧はぬれは瘰癧を治す
 瘰癧生きたる多くと瘰癧の用といふは飲食薬味

これと用く功他油と倍は又臘月の瘰癧も瘰
 瘰癧膏薬等といふと月令廣義より云へり
 元刀劔瘰癧等といふと十月より正月までの間は
 下らぬ瘰癧よく瘰癧生きたる瘰癧中といふ瘰癧
 柳の枝と切て蒸すれおは地は瘰癧の瘰癧にして瘰癧
 此月忍冬煮と納すといふこれと又月令廣義より云へり
 てのめは瘰癧と瘰癧
 冬月甚多して瘰癧の者いふと冬月瘰癧
 或冬月ある瘰癧を治すといふ瘰癧は瘰癧すといふ瘰癧
 微氣の中を瘰癧を治すといふ瘰癧を治すといふ瘰癧

たる衣とさしくこれとつこころ米と飯糰一へ袋
 に入んと麩すへ一米ひゆきハ又他の袋に飯糰
 たる米と入る麩すへ一或火とたきり竈の下に懸
 と用りもへへるうけして為濕より目用氣同
 後を薑湯温酒粥をこして保すへ一先をこ
 と温すへ火とこころわづの冷血と火氣と争
 ぬるす又雄黄煇硝等分と用て末に赤眼角に懸
 續物志よとく十二月甲ある物と食らへるわづの
 類あり月令度義よとく猪肉猪猪肉生椒と食らへ
 馬糞よ燻く果菜と食らへる此と多食らへる決

物に筋骨と食事かられ来る書にとく蟹と食
 らるる身人にと害す牛肉と食らへるは蟹と
 する物と食らへるは身神氣と持す蚌蝦乃類と食
 事かられさへハ殿よとくは月のと草改と食へ
 一他月これと食へハ病と成す

損軒乃後よ雜書の中はと正月の食物禁を記
 その多し毎ふ某月某物と食へハ某病と成す
 一不於陰陽家の物志と後と一詳よを辨る
 記す此をふ気と一古れ方書に記す
 さら亦他家本草に記す載らるる物多し

作すへり決しその志れども今以書り以雜書此致
たをそまゆく載て人の技園の徳をうけ有る
乃ん人此擇くこれと為程とるよまのこ

十二月乃古候申一厚小郷申二鶴如集申三稚如離太
少多れ之候あり申四難如乳申五征多屬疾申六
水澤腹堅太大多れ之候あり
右一年十二月よりして
七年二候申り七を以て
去八月令及臣民其秋
津有子とよ半あり

十二月屋敷の刻敷少多六旨山吳反射大多八旨大
吳反射之月令度書

日本兼時記卷之七尾

附 都鄙祭事記

正月

元日 禁中御節會 ○二日 奉為本形吉松雛子 ○四日
苑多井殿遊鞠振 ○七日 禁中御節會 登面山系
才天系 茶橋川祓子 ○八月 十日と後七日御節會
○十日 西之入夷系 ○十三日 南都心經會 ○十四日 七
日と伊勢山回師子祓子 ○十五日 雲後爆竹 送祿祝
如子能 河内國平云河張 菟系國地及松雛子 ○十六日
林野御節會 瑞林寺大祝若 張祿同魔堂念仏
○十七日 伶人祿并露危丁 ○十八日 禁中爆竹 ○十九日

八幡夜祭事 廿五日と法成忌 ○廿二日 本山寺
初詣に任性 ○初宣 執事事

二月

朔日 七日と南教西多世同午四々と二月堂新 ○四日
初年忌 ○七日 十日と南教新の能 ○九月十日と
少許新也達き系経後 ○十日 本山麻苧寺忌 ○十日
涅槃会 暖藏大徳松 本末園寺忌 ○十六日 後院
○廿日 浅月忌 ○廿一日 天皇寺伶人孫 ○廿五日 送西
寺忌 少許天孫御玉日 吉祥院中 八徳所 龍泉寺府三祇忌 ○
初卯 大系聖忌 ○初午 福翁 止女堂 本橋寺藏

法成 和泉國水乃与初午忌 ○上申 春日忌 ○彼忌

三月

三日 替年闘籠 闘籠 佐若初午 石山忌 聖津忌 土佐
初年 初年 ○又日 一孝寺忌 竹寺寺忌 ○六日 一孝寺
忌 今日より 又日と暖藏大忌併 ○八日 泉涌寺忌
忌 ○九日 水尾忌 泉涌寺 本山忌 辨の忌 ○十日 今忌
安楽花 ○十一日 吉野會式 花見 ○十二日 今日より
日と天倉経孫律 日在八馬の 初敷之竹 今日より十日と善導寺大師
忌 本山永観堂 中々 ○十四日 玉生念佛 寺忌 ○十五日 比良忌
武州角田川大忌併 山崎火の忌 ○十八日 長後忌

○十九日 漢教新也身拔 ○十日 東寺住如弘法親權
之權 女防 ○中の午 午の日云々時ハ 始有以興出 中奉
多佛 九用 之流柔摘 石屋水修時矣

四月

朔日 以列苑麻矣 ○二日 三日 南教多否の然 ○四日
廣教矣 純回矣 ○八日 灌佛 山門戒壇堂至性 ○
九月 法多地之矣 ○十四日 南府の法事 ○十六日 三
井寺之園之矣 ○十七日 紀州和寺之矣 雜要師
日之山末態之矣 尾列之古承校觀之矣 ○廿日 勢
田量見 ○廿一日 多危如仇 ○上卯 始有矣 空修矣

○上辰 八條矣 ○上巳 山科矣 以列多矣矣 同堅回矣
○初申 大東矣 平野矣 ○初酉 松尾矣 ○初亥 大津矣
○中子 吉田矣 ○中卯 以列八條矣 ○中辰 向日の津矣
○中巳 久世矣 ○中午 賀茂矣 以列若の之矣 ○中
申 賀茂矣 山王日吉矣 宍上矣 ○中酉 賀茂矣
賀茂矣 松尾矣 梅之矣 園白殿聖教之津之矣 ○中
亥 漢教矣

五月

朔日 賀茂競字之搦 以列松中矣 ○二日 賀茂競字
之東矣 競字 園の羽津矣 ○七日 今交邪興津出 ○八日

三治集〇十三日 飯州宮國郡集〇十五日 今之集〇廿日
字治集見〇廿三日 坂本支社集〇廿八日 住吉河田之
〇晦日 祇堂沖輿使

六月

朔日 廿一と富士治〇二日 高旗の虫拂 廿〇又日
祇園會演初〇七日 祇園會 今日より十四日と祇堂
御講集〇十四日 祇堂會 尾列津島集 竹生集
後朝天子集〇十五日 尾列津島集 江戸山集
流系抄と祇堂會 他山集 寺家小倉祇堂會〇十六日
今日より四りと伊勢集〇十七日 相國寺懺法 志願

祭 廣島集〇十八日 祇堂沖輿入〇十九日 四多河原
納涼 七月より 〇廿日 鞠言行切〇廿日 崎と乳の納涼
〇廿二日 古坂庄集〇廿三日 松尾邪あふて能三友
所々友友〇廿四日 老忘干日訪 廿五日 法寺の出平
王若出拂 古坂天後被 楊立集〇晦日 賀屋久五月
被 住吉沖被 江川唐橋子日集〇尚月中 安藝之市日

七月

朔日 賀屋後日集〇六日 少野市子集〇七日 少野社
壇煤拂 車箱中集 并池坊三集 飛多并後朝 二在
参入〇八日 又珠集〇九日 古坂訪〇十日 清水子日訪

○十二日 十日とあがれす焼籠 ○十四日 禁中焼籠 ○十
五日 八幡安岳の臥 三升まゝ女宿 甚樂施徳鬼 今日
いり明日とさ成る不動子日系 十七日と白鳥浦さし焼籠
帳 ○十六日より火事山火の字松尾橋あけの字西知多成約
永の火 松尾橋自せり 丸の字松尾橋
勢別 富多成約と入 ○十七日 素多成約日系 ○十八日 所
言所出 ○廿日 地焼籠 ○廿一日 徳別焼籠

八月

朔日 禁中 ち方より所言多上 松尾橋 和泉國
村系 明り ○二日 堺天系 ○四日 山所天系 越前

教実亂は文系 ○又日 以別白焼籠 一戸帳
御所八幡系 甚多八幡系 烟枝系 八幡社ま令 本
々外系 大坂江川より火 度次月尺 以戸深川八幡
系 本門老海系 後前新焼籠 ○十八日 所言系 素多
系 ○廿二日 度次馬子休 ○廿三日 さいりく 徳前本
府天系 ○廿四日 吉田系 ○彼岸會

九月

一日 山所系 本帳系 ○八日 泉涌寺金刺會 ○九日 彌言系
本布系 磯棚系 伏所系 大坂生系 焼後
言良大明系 肥前系 徳前系 ○十日 下所系

大津正位文系 五條天孫系 山科口之文系 依勢正秀系
 ○十一日 伊勢守幣 出陣吉備之伊勢御被會 ○十二日
 右秦系 ○十三日 白川系 ○十五日 志倉系 栗田口系 江戶系
 御之三年上之被能馬 河内系 志倉系 志倉系 志倉系 ○十六日 志
 山系 志倉系 志倉系 ○十七日 播磨池田系 服漢系 ○廿日 下系
 志倉系 志倉系 竹田系 建仁寺門系 東系 整宮系 藤系
 の系 ○廿二日 大坂府麻系 院系 ○廿三日 志倉系 ○廿四日 志倉系
 本幅系 淨寺系 麻系 別系 志倉系 ○廿五日 天馬流満系 志
 田系 ○廿六日 山系 ○廿七日 播磨村系 ○廿八日 志倉系 大坂府
 系 ○廿九日 志倉系 ○初月 志倉系 志倉系 志倉系

十月

又日 如命連戸系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 ○廿六日 志倉系
 寺院系 ○十日 播磨系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 ○十
 三日 志倉系 志倉系 ○十五日 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系
 系 ○十六日 志倉系 志倉系 ○十七日 志倉系 志倉系 志倉系
 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系

十一月

八日 志倉系 志倉系 ○十三日 志倉系 志倉系 ○廿二日 志倉系 志倉系
 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系
 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系
 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系 志倉系

十二月

十五日ハ城安居かんざい○廿二日大徳寺だいとくじ天女あめめの十九日じゅうくと
枯尾山くすいさん佛必經ぶつひけい○晦日みづかひ祇園ぎんをめぐりけり
乃すなはち終はつり○幕まくら外がわ又また條じょう五ご律りつ本ほん吉田きちだ也

いふ國くにの火ひ土つち土つち保たもつとに多おほ信しん入いれと云いふ
甚いた難がた産う後ご此こゝ智ち多た丸まるの只ただ中ちゆう修しゆしゝるしると云いふ
やうの

和歌山県志紀傳

昔貞享五年戊辰三月上澣雒陽書肆日新堂壽梓

